

黙示録21章「天の都エルサレム」

1A 新しい都 1－8

1B 夫のために整えられた花嫁 1－4

2B 事の成就 5－8

2A 子羊の妻 9－21

1B 御使いによる案内 9－11

2B 高い城壁と門 12－14

3B 都と城壁の寸法 15－17

4B 宝石の輝き 18－21

3A 主ご自身の光 22－27

1B 都の中 22－23

2B 諸国の民の栄光 24－27

本文

黙示録 21 章を開いてください。私たちは、前回、20 章で地上における神の国の幻を見ました。キリストが戻ってこられ、王として統治します。そしてキリストにある者たちも共に治めます。その終わりに、悪魔が鎖から解き放たれ、多くの者を惑わしますが、主は天からの火をもってその軍勢を滅ぼし、悪魔を火の池に投げ込まれます。それから、20 章 11 節ですが、注目してください。最後の審判、大きな白い御座が現れるのですが、「**地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。**」とあります。ここで、今の天と地が過ぎ去ったのです。それから、死とよみが海から出されて、人々がよみがえり、主によって、彼らの行いによって裁かれ、火と硫黄の池に投げ込まれます。これが、前回までの話でした。

そして 21 章においては、すべてが新しくされた姿、究極の姿を見ます。

1A 新しい都 1－8

1B 夫のために整えられた花嫁 1－4

¹また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

「**新しい天と新しい地**」です。これは、今の天と地ではなく、完全な新創造であります。この言葉が出てくるのは、イザヤの預言です。「65:17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。」ここの「創造する」という言葉は、ヘブル語の「バラ」です。これは創世記 1 章 1 節に使われている言葉であり、無から有を創造することです。もう一つ、「造る」というヘブル語で「アサ」がありますが、それは「既に存在しているものから何かを

造る」ことを表します。無から有の創造だからです。

この全く新しい創造、再創造を主は今、ここで行われているのです。このことを、ペテロが第二の手紙で話していました。「3:12-13 そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」全ての天の万象が崩れ去り、溶け去ります。そして、全く新しく、天と地が造られます。完全な万物の一新であります。そして、その新天新地の特徴は「正義が住んでいる」とあります。神の正義が満ちているところであり、栄光の姿に変えられた者たちだけが住むことのできる場所です。

これは、万物と神との和解であります。「コロ 1:20 その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださったからです。」キリストの流れされた血によって、私たちの魂が罪から清められただけでなく、万物が神と和解されたのです。

そして「以前の天と、以前の地は過ぎ去り」とあります。イエスも、このことを意識して、ご自分のことばの確かさを語られました。「マタ 24:35 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」ヘブル書の著者は、詩篇 102 篇を引用して、これが着物を着替えることとして語っています。「1:10-12 主よ。あなたははじめに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながえられます。すべてのものは、衣のようにすり切れます。あなたがそれらを外套のように巻き上げると、それらは衣のように取り替えられてしまいます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。」

そして、「もはや海もない」とあります。前回話しましたが、20 章において、海の中に死者がおり、死者がよみから出されたとありましたが、神を認めない者たちがいるところとして海があります。17 章においては、大淫婦が座っていたのは大水の上であり、それは、もろもろの民族、群集、国民、国語であるとあります(15 節)。獣、反キリストも、13 章によると、海から出てきていることが分かります。海は、このように不法と不正、罪が葬り去られているところとして描かれています。福音書にも、小さき者をつまずかせる者は、碾き臼をくりつけて、海に投げ込まれたほうがましとありますし、レギオンが、湖の底に豚と共になだれ込んだところにも表れています。そして、ミカの預言の最後に、罪を海の深みに投げ入れてください、という言葉があります(7:19)。

そして、創世記の始まりを思い出してください。「1:1-2 はじめに神が天と地を創造された。地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。」大水がありました。その大水の下部分が海と主は名づけられますが、ここには既に闇、すなわち罪や陰府

を連想する存在となっています。これが無くなります。ですから、罪もなくなり、死もなくなり、陰府もなくなった世界です。新天新地は創世記 1 章 2 節よりも、さらにバージョン・アップした新しい秩序だということがお分かりになると思います。

² 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから、天から降って来るのを見た。

新しい天と地の次には、「新しいエルサレム」です。新しいエルサレムというからには、古いエルサレムがあるのですが、地上にあるエルサレムです。そこも、ここにあるように聖なる都であり、主ご自身が住まわれるところでした。千年王国のエルサレムも、「聖徒たちの陣営と、愛された都」と書かれていました(20:9)。しかし、それよりも上位にあるエルサレムがあります。パウロが、ハガイとサラの対比を使って、地上のエルサレムの他に、上からのエルサレムがあることを話しています。「ガラテヤ 4:25-26 このハガルは、アラビアにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、今のエルサレムは、彼女の子らとともに奴隷となっているからです。しかし、上にあるエルサレムは自由の女であり、私たちの母です。」

天にある都について、旧約時代から、信仰の父祖であるアブラハム、またイサクやヤコブもこれを恋慕していたことを、ヘブル書の著者が述べています。「11:16 しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」そして、同じくヘブル書で、シナイ山に対比させて、天においてシオンの山があることを教えています。「ヘブル 12:22-24 しかし、あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い、天に登録されている長子たちの教会、すべての人のさばき主である神、完全な者とされた義人たちの霊、さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る、注ぎかけられたイエスの血です。」

それが、天から、上からエルサレムが来るというのは、まさに神の御座のある天が降りて来ることです。聖書において「天」というのは、神の御座があるところとして啓示されていました。あらゆる被造物、目に見える物には全く影響されない、神が王として治め、栄光をお受けになっているところとして現れています。「詩篇 115:2-3 なぜ国々は言うのか。「彼らの神はいったいどこにいるのか」と。私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。」

「天から降って来る」という表現ですが、私たちが新しく生まれることをイエス様がニコデモに語られた時に、語られたことを思い出します。「ヨハネ 3:3 まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ここの「新しく生まれる」という言葉は、「上から生まれる」とも訳すことのできる言葉です。したがって、私たちの御霊による新生体験

は、まさに将来の新しいエルサレムを前もって味わう、そのミニチュア版であることが分かります。

それから、「夫のために飾られた花嫁のように」整えられているとあります。すでに、19 章で、天において子羊の婚宴にあずかった私たちがいました。天に引き上げられている教会の姿です。ここでは、都自体が花嫁のように着飾っています。イザヤの預言にも、同じように花嫁のように着飾っているエルサレムの姿が出てきます。「イザ 54:11-12 苦しめられ、嵐にもてあそばれ、慰められなかった女よ。見よ。わたしはアンチモンであなたの石をおおい、サファイアであなたの基を定める。あなたの塔を紅玉にし、あなたの門をきらめく石にし、あなたの境をすべて宝石にする。」この様子を、9 節以降で読んでいきます。

こうしてみると、まるで万物が結婚式場のようにさえ見えます。全く新しくされた天と地です。その舞台に、宝石で光り輝く花嫁の姿がやってきたかのようです。

³ 私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。

午前礼拝で、ここの部分をじっくりと見ました。神の人間に対する究極の目的です。神が人々と共に住われることです。ここでは、まるで結婚した夫婦が、共に一つの幕屋に入り、床入れをするかのように描かれています。

そして、「人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として」という言葉ですが、エレミヤ書 31 章 33 節にある新しい契約にも使われている言葉でした。「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」とあります。罪が赦され、拭い去れることによって、個人的な関係に入っています。

⁴ 神は彼らの目から 涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

これまでの苦しみに対する永遠の慰めです。これは、「死」が取り除かれることによって、死によってもたらされる悲しみ、叫び、苦しみを無くすということです。

人間にとって、もっとも不条理なことは「生を受けたのに、死ぬ」ということです。ヨブのことを思い出してください、彼はとてつもない苦しみの中に入れられた時に、自分の生まれてきた日を呪いました(3 章)。人は元々、死ぬために生まれていなかったのです。アダムとエバは、死ぬようには造られていませんでした。罪が死をもたらしただけです。この苦しみをよく表しているのが、あのラザロの死においてです。「ヨハネ 11:33-38 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、「彼をどこに置きましたか」と言わ

れた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか」と言った。イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。」イエスの流された涙、そして心の憤りは、死そのものに対する憤りです。

パウロは、最後の敵を「死」と位置付けています。「1コリント 15:24-26 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。最後の敵として滅ぼされるのは、死です。」最後の最後まで残っていたものが、死でありました。ですから、最後の審判において、「死とよみ」(20:13)を火の池に投げ込まれたのです。

そして、「以前のものが過ぎ去ったからである。」と言っています。私たちが、罪と死からもたらされた悲しみ、苦しみ、すべてのものが過ぎ去ります。なんという慰めでしょうか！

2B 事の成就 5－8

⁵ すると、御座に座っておられる方が言われた。「見よ、わたしはすべてを新しくする。」また言われた。「書き記せ。これらのことばは真実であり、信頼できる。」

ここから、御座に着いておられる方、神とキリストご自身の言葉です。「わたしはすべてを新しくする。」であります。思い出すが、パウロの言葉です。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」私たちが霊的に新生したことを話しているだけではなく、万物が一新することまで含んでいます。御霊による新生というのは、被造物が全く変えられる、新たにされることの初穂、始まりなのです。私たちの中に、将来の希望、宇宙も全てが変えられるのだという希望があるのです。

そして、わざわざ、「真実であり、信頼できる。」と言われているのは、あまりにもすばらしいから、信じられないかもしれないと思い計って、語っておられる言葉です。主ご自身が今、太鼓判を押しておられるのです。

^{6a} また私に言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。」

「事は成就した」という言葉ですが、イエスが十字架の上でも同じような言葉を語られましたね。「ヨハネ 19:30 イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。」主の完了されたわざは、ここにおける万物の一新の成就にまで至っています。

そして、「わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。」という言葉がありますが、イエスご自身が 1 章においてそうご自身をお呼びになっていました。初めから終わりのことまでを知っておられ、支配しておられるということです。

^{6b} わたしは渇く者に、いのちの水の泉からただで飲ませる。

主は、黙示録をヨハネに書き記させたご目的を、21 章また 22 章でお語りになられていきます。これは、教会に永遠のいのちの確信を持たせるためであり、そして、これから救いを受け入れる人々にも呼びかけている、つまり伝道をしておられるのです。

この言葉は、最も単純な形で福音を宣言している言葉です。人間は渇いています。神はいらないと言っている者も、生ける神を慕い求めて、あえいでいます。空白を埋めるために、いろいろなことをします。それは、「いのちの水」を求めているのであって、キリストにある神との関係が、その水なのです。サマリヤの女に対して、イエス様が言われました。「ヨハネ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」

次回 22 章も 17 節で、同じことばで主が呼びかけておられるので、その時にじっくり学びます。

⁷ 勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。

アジアの七つの教会に対する、勝利を得る者へのイエスの言葉を思い出してください、その数多くのものが、新しいエルサレムにある分け前でありました。エペソの教会に対しては、このようなものです。「2:7 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」そして、フィラデルフィアにはこのように言われました。「3:12 わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記す。」私たちの希望は、この都を受け継ぐことです。

⁸ しかし、臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、淫らなことを行う者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者たちが受ける分は、火と硫黄の燃える池の中にある。これが第二の死である。」

主は、ここで厳粛な警告を行なっておられます。20 章の最後に、火の池、第二の死についての啓示がありましたが、新しいエルサレムの啓示の中にも、主はこのことを忘れてはいけなことを

教えておられます。

これは、預言者たちにも示されていたことです。イザヤの預言では、新しい天と新しい地のことの宣言が、66 章 22 節にあります。「わたしが造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くのと同じように、——【主】のことば——あなたがたの子孫とあなたがたの名もいつまでも続く。」けれども、24 節にはその反対のところにいる者どもについて、宣言しておられます。「彼らは出て行って、わたしに背いた者たちの屍を見る。そのうじ虫は死なず、その火も消えず、それはすべての肉なる者の嫌悪の的となる。」永遠のいのちは、永遠の滅びから免れる、永遠の救いだということです。

ここの「臆病な者、不信仰な者」というのが始めにあります。恐れて主に近づかない、それで信じてないという者です。一タラントを受けたしもべも、主人を恐れて、関わりを持とうとしませんでした。そのために、心が神に結びつかず、世の流れにそのまま流されるままにしかできないのです。そこから、いろいろな偽りの行動があるのです。「ヘブル 10:36-39 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。「もうしばらくすれば、来たるべき方が来られる。遅れることはない。わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」

2A 子羊の妻 9-21

1B 御使いによる案内 9-11

⁹ また、最後の七つの災害で満ちた、あの七つの鉢を持っていた七人の御使いの一人がやって来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。あなたに子羊の妻である花嫁を見せましょう。」

天から降りてきた都について、御使いがこれから案内をします。「最後の七つの災害で満ちた、あの七つの鉢を持っていた七人の御使いの一人」ですが、大バビロンに対する神の裁きを、御使いが紹介しましたが、同じように、最後の七つの災害で鉢をぶちまけた御使いの一人でありました。世にある大いなる都に対する、新しい天の都にある栄光を比べています。一方では大淫婦でしたが、こちらは、「子羊の妻である花嫁」であります。

ここにおいて、大きな対比があるのです。この世における大きな都は、大淫婦であります。忌まわしい淫行を、世界の王たちと行っています。不正の富を築き、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血で酔いしれている姿があります(5節)。多くの姦淫を犯している汚れた女に対して、ここでは、清純な花嫁、子羊の妻が描かれています。

これから、宝石の輝きで飾られている都を見ますが、まさに妻となる花嫁がそのように着飾るようにして、エルサレムが光り輝くことを、イザヤが預言していました。「54:11-14 苦しめられ、嵐に

もてあそばれ、慰められなかった女よ。見よ。わたしはアンチモンであなたの石をおおい、サファイアであなたの基を定める。12 あなたの塔を紅玉にし、あなたの門をきらめく石にし、あなたの境をすべて宝石にする。13 あなたの子たちはみな、【主】によって教えられ、あなたの子たちには豊かな平安がある。14 あなたは義によって堅く立てられる。虐げから離れていよ。恐れることはない。恐怖から離れていよ。それが近づくことはない。」

¹⁰ そして御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行き、聖なる都エルサレムが神のみもとから、天から降ってくるのを見せた。

御使いは、ヨハネを御霊によって連れて行っていますが、17 章で大バビロンの時は、「荒野」に連れて行かれています。バビロンは、富や人間の欲望がたくさん詰まっているところかもしれませんが、そこには命の潤いがなく、また悪霊どもが棲むようなところです。

しかし、ここでは「大きな高い山」に連れて行かれています。主は、ご自分の計画の中で、高い山でご自分の力と栄光を表してこられました。シナイ山の麓に、イスラエルを集めて、ご自身の栄光を表されました。約束の地をモーセに見せる時は、ネボ山に連れて行かれました。イエスが説教をされたのも山の上でしたし、ペテロとヨハネとヤコブにご自分の栄光をお見せになった時も、高い山に連れて行っておられました。そして、エゼキエルが地上の御国、千年王国における神殿を見せられた時にも、高い山に連れて行かれています。「神々しい幻のうちに私はイスラエルの地に連れて行かれ、非常に高い山の上に降ろされた。その南の方に、町のようなものが造られていた。(40:2)」そして、天のエルサレムも高い山にあります。そして、その大きな高い山に、聖なる都が天から降りてきます。

¹¹ 都には神の栄光があった。その輝きは最高の宝石に似ていて、透き通った碧玉のようであった。

聖なる都エルサレムの何と言っても特徴は、「神の栄光」です。次回、22 章の始めにも都の幻は続きますが、その特徴は「いのち」です。ここでは神の栄光であります。私たちは、礼拝を献げ、またすべてのことを神の栄光のために行うように命じられています。「Ⅰコリ 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

その輝きは「最高の宝石」に似ているとあります。黙示録 4 章において、神の御座が宝石の輝きで輝いているのを見ます。「すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。(4:2-3)」エゼキエルが見た幻でも、主の御座がこのように輝いていました。「彼らの頭上、大空のはるか上の方は、サファイアのように見える王座に似たものがあり(1:26)」そして、シナイ山でも、そのふもとが「御足の下にはサファイアのような敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そ

のものようであった。(出エジプト 24:10)」とあります。御座にある栄光です。

私たちは、自分たちが「土の器の中の宝」だということです。「『闇の中から光が輝き出よ』と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。私たちは、この宝を土の器の中に入れていますが。(2コリント 4:6-7)」私たちが、いつも信仰をもって、卑しいように見える姿、低められているように見える姿、情けないように見える姿、弱き姿、そういった土の器を見る時に、神の輝きが光りますね。

そして、「**透き通った碧玉**」とありますが、これは後で見ると分かりますが、都の城壁が碧玉に似た輝きを持っているためです。そして都そのものは、ガラスのように透き通るほどの純金のような輝きを持っています。それで、透き通った碧玉のように見えます。

2B 高い城壁と門 12-14

¹² 都には、大きな高い城壁があり、十二の門があった。門の上には十二人の御使いがいた。また、名前が刻まれていたが、それはイスラエルの子らの十二部族の名前であった。¹³ 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。

都には、「**大きな高い城壁**」があります。これは、都の特徴です、外敵から守るためです。神の都においては、すべての者たちが入れるのではないことをここでは物語っています。神に敵対する要素、分子は全て排除され、ここで守られます。ここに入るということは、すなわち救いです。神のものにされている者たちは、ここにいて安全です。そうでない者たちは、中に入ることができず、それが、聖書では「滅び」と呼ばれます。第二の死のことです。

そして「門」ですが、ソロモンの神殿の時、レビ人が門衛を命じられましたが、人が汚れたままが入って来ることがないよう、外部からの汚れが入って来ることがないよう、監視しています。そして、礼拝者は、無事に、安心して入って来られるように案内します。天のエルサレムでは、御使い自身がその門衛の役割を果たします。

そしてその門ですが、「**イスラエルの子らの十二部族の名前**」が刻まれていて、かつ、東西南北にそれぞれ三つずつの門があります。ここから、聖なるエルサレムには教会だけが入るのではないということが分かります。天のエルサレムは、イスラエルを通して入るのです。イスラエルを神は選ばれ、彼らによってご自身を現わしました。そしてイスラエルの民が最終的に救われ、その贖われた十二部族をもって、天のエルサレムが成り立っていると言えます。ですから、私たちは今も、ユダヤ人がこの地上に生きており、しかも民として、国としてイスラエルも存在しているというのは、神の証しです。そして、キリストにあってイスラエル全体も救われます。

東西南北の方向にそれぞれ三つずつの姿は、まさにイスラエルの荒野の旅における宿営の姿です。民数記にありますが、幕屋を中心にして、東にはユダ、ゼブルン、イッサカル族が、西にはエフライム、マナセ、ベニヤミン族が宿営し、南はルベン、ガド、シメオン、そして北はダン、アシェル、ナフタリでした。黙示録 7 章で、患難時代の時に既に、14 万 4 千人のイスラエル十二部族が神のしもべとして、額にその印が押されていましたが、彼らは初穂であると 14 章にありました。今、その贖われたイスラエル全体が門となっています。

¹⁴ 都の城壁には十二の土台石があり、それには、子羊の十二使徒の、十二の名が刻まれていた。

イスラエルが都の城壁の門であれば、それを支える土台は教会だということです。預言者によってキリストが伝えられ、使徒たちによってキリストが宣べ伝えられました。その預言者たちと使徒たちによって、教会が成り立っています。「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。(エペソ 2:20)」私たちがゆえに、教会として使徒たちの教えを堅く守っているのです。使徒 2 章には、教会が使徒の教えを堅く守って、祈って、パンを裂き、交わっていたとあります。

そして気づいていただきたいのは、キリストがここでも「子羊」と呼ばれていることです。22 章でも呼ばれます。つまり、主イエスは永遠に、罪によって屠られた方としてほめたたえられるのです。私たちは、自分の罪が赦された、その血潮によって清められたということについて、卒業することはありません。永遠にほめたたえるのです。

3B 都と城壁の寸法 15－17

¹⁵ また、私に語りかけた御使いは、都とその門とその城壁とを測るために金の測り竿を持っていた。¹⁶ 都は四角形で、長さとは同じである。御使いがその竿で都を測ると、一万二千スタディオンであった。長さも幅も高さも同じである。

寸法を測るということは、御使いがエゼキエルに対しても、千年王国の神殿を測る時にそうしていました。そして、黙示録 11 章の患難時代の神殿において、外庭を測ってはいけない、そこは異邦人に任せられているからという言葉があります。測ることによって、そこが神の領域であり、聖なところであることを示しています。その寸法ですが、1スタディオンを 185 ㊦で計算すると 2220 ㊦になります。この体積は、ちょうど月と同じぐらいです。また、1 万 2 千という数字は統治を表しており、十二部族、十二使徒と並んで、神が治めておられる姿を示しています。

そして、「長さも幅も高さも同じである」とあります。つまり、立方体ということです。午前礼拝で学びましたように、これは至聖所と同じ形状であり、神の民がすっぽりと神のご臨在の真ん中に入れている、ということです！

¹⁷ また城壁を測ると、百四十四ペキスあった。これは人間の尺度であるが、御使いの尺度も同じであった。

1 ペキスを 44 ^{ゼン}で計算すると、144 ペキスは 63.36 ^{トル}です。そして、144 という数字ですが、12 を 12 で掛けたものです。これが城壁の高さであり、また厚みにもなっていたと考えられます。そして、14 万 4 千のイスラエルの民、神の僕たちの数字にも出てきました。12 という数字で、天のエルサレムが特徴づけられており、12 が統治を示す数字であることが分かります。

4B 宝石の輝き 18－21

次は、最高の宝石と先ほどヨハネが描写した、その宝石の材質について詳しく説明しています。

¹⁸ 都の城壁は碧玉で造られ、都は透き通ったガラスに似た純金でできていた。

「透き通ったガラスに似た純金」、つまり、全く混じりけがない、不純なものは入っていないということです。イエス様は、「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。」と言われました。

¹⁹ 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド、²⁰ 第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九はトパーズ、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。

使徒たちの名が刻まれているその土台石の材質です。聖書の翻訳によって、どの宝石なのか変わって来ますし、新改訳の第二版と 2017 を比べてもかなり変わっています。これが、地上で見る宝石とは異なるものであり、あくまでも輝きがどのようなものであるかを示しているだけです。

大事なものは、主の御座には宝石の輝き、多彩な輝きに満ちているということです。主が、墮落する前のサタン、ケルブについて、このように言われています。「エゼキエル 28:13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。」至聖所に入る大祭司の装束には、胸当てがあり、その胸当てに十二の宝石が埋め込まれていました。「出エジプト 28:17-20 その中に宝石をはめ込み四列にする。第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。¹⁸ 第二列はトルコ石、サファイア、ダイヤモンド。¹⁹ 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。²⁰ 第四列は緑柱石、縞めのう、碧玉。これらが金縁の細工の中にはめ込まれる。」

²¹ 十二の門は十二の真珠であり、どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは純金で、透き通ったガラスのようであった。

真珠は、貴金属の中でも最高の高価なものとして、当時、みなされていました。マタイ 13 章で、その貴さが示されている譬えがあります。「13:45-46 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」

そして、「都の大通りは純金で、透き通ったガラスのようであった」とあります。あまりにも混じりけがないので、ガラスのように透き通っています。

このようにして見ると、私たちは地上における富や栄光というものが、どれだけ天においてはちんけなのかが分かりますね。モーセは、このことを知っていたので、苦しむイスラエルと共にいることを選びました。「彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。(ヘブル 11:26)」また、イエスは、バプテスマのヨハネについて、こう言われました。「マタ 11:11 まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。しかし、天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。」これだけ、天の御国が優れているのです！

3A 主ご自身の光 22-27

そして次、今まであったものを「見なかった」という表現で無くなっていることを説明しています。

1B 都の中 22-23

²² 私は、この都の中に神殿を見なかった。全能の神である主と子羊が、都の神殿だからである。

一つは、神殿がないということです。神は聖なる方であります。神は人と住まわれる所として神殿を与えられました。必ず仕切りがあったのです。聖なる神ですから、仕切りがなければたちまち私たちはほろぼされてしまいます。しかし、主が十字架につけられ、その肉体によって仕切りが取り除かれました。そしてここで、天のエルサレムにおいては、この方の御座のあるところに、そのまますっぽり入れられているのです。

²³ 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都のあかりだからである。

次に無いものは、太陽や月です。千年王国の時には、太陽も月もあります。イザヤ書に、「30:26 主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日に、月の光は日の光のようになり、日の光は七倍になって、七つの日の光のようになる。」とあります。しかし、イザヤは新しい天と新しい地における秩序も話しました。そこでは、太陽も月も照らさず、主ご自身が永遠の輝きとなると預言しています(60:19-20)。七倍の輝きになることも、あまりにも深い慰めですが、それを必要とし

なくなる、つまり、神と子羊の光そのものが都を照らしている、その傷は全く取り去られます。

初めのことを考えてみましょう。天地創造の第一日目に、光よあれと命じられ、光がありました。しかし第四日目に、太陽と月、星など光る物があるようにせよ、と言われました。では、第一日目の光は何だったのか？それは、神とキリストご自身の光、栄光の光だったのです。ですから、天のエルサレムは、エデンの園のように取り戻す以上に、さらにアップグレードした神の完全な秩序だということです。

2B 諸国の民の栄光 24-27

²⁴ 諸国の民は都の光によって歩み、地の王たちは自分たちの栄光を携えて来る。²⁵ 都の門は一日中、決して閉じられない。そこには夜がないからである。²⁶ こうして人々は、諸国の民の栄光と誉れとを都に携えて来ることになる。

次に無いものは、「夜」であります。夜、闇は、罪と不法、悪を象徴しています。「ヨハ 3:20 悪を行なう者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」それが全くないので、夜もありません。ここで、非常に興味深いことがあります。創世記 1 章、そのはじまりには闇がありました。「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。(2 節)」神の創造の働きにおいて、その前の姿には闇があったということです。闇であるところに、ご自分の光を照らされました。しかし、その闇そのものも無くしてしまわれたということです。黙示録 21 章は、創世記 1 章 2 節より、さらにアップグレードしているのです。

そして、諸国の民、また王たちが門から入ってきています。天の都はあくまでも都ですから、新しい地は、その外に広がっています。そこに、千年期の終わりにサタンが解き放たれて、多くの者を惑わしますが、その惑わしに乗らなかった人々がいます。世界の人々が、自分たちの栄光を携えている姿は、イザヤの預言に、千年王国ですが、主の栄光がエルサレムにとどまっている姿が 60 章 10-11 節に書かれています。これは、まさに礼拝の姿です。すべてのことについて神に栄光を携えます。

そしてここに、「一日中、決して閉じられない」ということは、当時を知る者は驚くべきことです。町というのは、城であり、城壁があり、城門がありました。夕暮れになったら、必ず戸は閉められました。敵が入って来るからです。そして門が閉じられて、そこに人が来ても絶対に開けたりしません。これが苛酷な当時の状況です。それがずっと開けられているということは、完全に安全になっているということです。私たちに、悪はもはや触れることはできないのです。悪に勝利しているのです！

²⁷ しかし、すべて汚れた者や、忌まわしいことや偽りを行う者は、決して都には入れない。入ることができるのは、子羊のいのちの書に名が書いてある者だけである。

最後に、天のエルサレムでいないのは、汚れた者、忌まわしい者、偽りを行なう者です。「いのちの書」が、約束として何度となく黙示録に出てきたことを思い出してください、サルデイスにある教会に対して、イエス様は、「その者の名をいのちの書から決して消しはしない。(3:5)」と言われました。いのちの書に名が記されていない者は、火と硫黄の池に投げ込まれることが 20 章 14 節に書いていました。イエスの名によって、いのちを得ているかどうか？が最も大事なことです。

そこで最後に、同じく黙示録の七つの教会の一つである、フィラデルフィアの教会への約束を眺めてみたいと思います。「わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記す。(3:12)」これぞ、永遠の保障です。主が永遠に、私たちをご自分の都の中で守り、ご自分の所有としておられるという約束です。

自分自身には、このような保障は出てきません。いつ離れてしまうか、つまづいてしまうか分かりません。神の行なわれていること、恵みの中に生きることによって可能です。そのことに信仰を置くのです。